



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マクルーハンにおける「技術」と「身体」の相互作用をめぐる一考察：アンダーソンのナショナリズム論を介したマクルーハンのメディア論再考
Author(s)	趙, 瀚雲
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 29, 73-87
Issue Date	2019-10-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75960
Type	departmental bulletin paper
File Information	073-087-05_Zhao.pdf



マクルーハンにおける「技術」と 「身体」の相互作用をめぐる一考察 —アンダーソンのナショナリズム論を介した マクルーハンのメディア論再考—

国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

趙 瀚雲

趙
瀚
雲
ZHAO Hanyun

A Discussion on the Interaction between
Technology and the Body as Shown in
McLuhan
— Revisiting McLuhan's Media Theory from the
Perspective of Anderson's Nationalism Theory

ZHAO Hanyun

abstract

This paper aims to elucidate the interaction between technology and the body in McLuhan's media theory through Anderson's nationalism theory. Anderson hinted at the idea of the transformation of nationalism, but he did not complete the task of elucidating the mechanism of how nationalism changes; one reason behind this is that it only addresses the background of the modern era. On the other hand, McLuhan's concept of technology has the potential to go beyond the limit of this era as a diachronic concept. Therefore, elucidating the parallel relationship between the technology-body interaction under the media theory and the modernity-fatality interaction under the theory of nationalism allows us to open up the new possibility for discussing nationalism theory from the perspective of media theory.

1 はじめに

本稿は、マーシャル・マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」の相互作用¹を解明すること、その相互作用とナショナリズムの関連性を検討することを目的としている。

マクルーハンは「技術」と「身体」の関係性をメディア論の中核に置く。彼は「技術」と「身体」について定義付けをしていないが、彼のメディア論の文脈に従えば、「技術」と「身体」の概念を次のように抽出することができる。「身体」とは、人間の生物学的な特性及び精神的な特性——つまり人間の肉体及び肉体に依存する精神や思考を含む感覚あるいは心理的活動を指す。「技術」とは、「身体」の機能や感覚を拡張する効果をもたらすメディア²である。この「技術」と「身体」の関係性の枠組を通して、マクルーハンのメディア論は一つのナショナリズム論を提示する。マクルーハンは著書『グーテンベルクの銀河系』（以下GG）³と『メディア論』（以下UM）⁴において、近代複製技術が統一的で均質的な時間と空間観念をもたらすことでナショナリズムを醸成する新しい社会空間を創り出すと指摘する。

彼の主張は後のナショナリズム論に多大な影響を及ぼす。代表的な研究はベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』（以下IC）⁵に他ならない。アンダーソンによれば、近代複製技術はネーションという共同体をめぐる想像力の形成を促すという。津田（2016）は、アンダーソンの共同体論と、印刷技術によって社会的連帯の境界が広がっていくというマクルーハンの主張との間には強い親和性があると指摘する（津田2016:99）。マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」に関する議論から、ナショナリズム論へとつながる潜在的可能性がある。

ただし先行研究では、マクルーハンのメディア論においては「技術」が「身体」に一方向的に影響を与えるという考え方が一般的である。たとえば吉見（1994）は、「マクルーハンが徹底して技術的变化を説明変数に、「身体」をめぐる生の様式という文化変容を従属変数に置いている」とし、「技術」の主導的な作用を指摘する（吉見1994:90、括弧引用者）。これらの先行研究には「身体」が「技術」からの影響を如何に受け入れるかについての、「身体」側に着目する考察はほとんど見られない。ところが、実はマクルーハンは「身体」が「技術」へ作用を及ぼすことについても言及している。この点から、「技術」と「身体」の関係性は十分に考察されているとはいえない。メディア論研究において「身体」側からの作用を見過ごした結果、マクルーハンが技術決定論者ではないか、というような批判を招きかねないのみならず、「技術」に手を加えることだけでナショナリズムを変容させることができる、という誤解も生じやすくなる。

本稿の目的は、マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」の関係性において相互作用的なダイナミズムを抽出し議論することにある。こ

▶1 本稿では「相互作用」の概念を使って、二つのものが互に対立するにもかかわらず、相互に影響し合う共働関係を示す。

▶2 マクルーハンにおいて、一般に「メディア」は「技術」とつながられて論じられているが、文脈によって「身体」とつながられて論じられることもある（例えば皮膚を温度が伝わるメディアとして取り扱う場合等）。本稿では「メディア」概念を、「技術」とつながる一般的な意味で用いる。

▶3 本稿は『グーテンベルクの銀河系』をGGと表記する。この本よりの引用を、GGと英文版（1962=2014）のページ数＝邦訳（1986）のページ数の形で示す。

▶4 本稿は『メディア論』をUMと表記する。この本よりの引用を、UMと英文版（1964=2005）のページ数＝邦訳（1987）のページ数の形で示す。

▶5 本稿は『想像の共同体』をICと表記する。この本よりの引用を、ICと英文版（1983=2006）のページ数＝邦訳の定本版（2007）のページ数の形で示す。

の考察の意義は二つある。第一に、マクルーハンにおけるメディアとしての「技術」と「身体」の関係性を一方向的ではなく、相互作用の視点から再確認すること。またこの作業を通して、第二に、メディア論の視点からのナショナリズム論を刷新すること。たとえば国境を越える地球温暖化及びテロリズムは人類共通の課題である。こうした課題を議論する際、ネーション及びナショナリズムの限界を克服する方法論が必要となる（平子2003）。一方、「技術」の進歩に伴うグローバル化が進展している現代において、ナショナリズムは衰退するどころか、時々ラディカルな形（テロリズムはその一例であるが）で現れることもある。このような現実はある意味、ナショナリズムが「技術」のみに影響されているということを否定している。したがって「技術」と「身体」の関係性を見直すことで、ナショナリズム論の新しい可能性を見出すことが期待できる。

本論の主題は、マクルーハンにおける「技術」と「身体」の関係性を明らかにすることである。この関係性をより精緻に描き出すために、アンダーソンのナショナリズム論を参照する。この作業を通して、マクルーハンの「技術」と「身体」をめぐる議論が持つ理論的意味・含意・射程を再確認する。なぜなら、アンダーソンのナショナリズム論においても、こうした関係性が（別の形で）描出されているからである。さらに本稿は、明らかにされた「技術」と「身体」の関係性をアンダーソンにフィードバックすることで、彼のナショナリズム論を再解釈する。

本稿の構成は以下になる。第2節では、「技術」と「身体」の関係性からナショナリズム論を見直す意義を示した新倉（2016a）の先行研究と、メディア論における「技術」による作用を「身体」が如何に受容し、調整していくのかという「身体」の反作用の過程を提示した柴田（2013）の先行研究を取り上げる。第3節では、マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」の相互作用を解明し、こうした相互作用をさらにアンダーソンのナショナリズム論における近代性と宿命性との関係性に見ることで、ナショナリズムを再解釈する⁶。第4節では、本論の結論をまとめ、この考察の意義を再び提示する。

▶6 注：アンダーソンの近代性と宿命性の相互作用に関しては、以下の拙論で詳細に論じている。『「想像の共同体」における近代性と宿命性の相互作用——ベネディクト・アンダーソンのネーション論再考』『国際広報メディア・観光学ジャーナル』2018（27）。

2 先行研究

2.1 「技術」と「身体」の関係性の視点からのナショナリズム理解

新倉はアンダーソンのナショナリズム論の研究者であるが、マクルーハンのメディア論も新倉の研究において重要視されている。というのは彼の考察においてアンダーソンはマクルーハンと親和的であるからだ。新倉（2008）はアンダーソンの議論におけるメディアとナショナリズムの関連性について次のように提示した。「メディアとナショナリズムの結びつきは、すでにマク

ルーハンのメディア論において展開されてきたものであり、アンダーソンの議論のオリジナリティではない」(新倉2008: 79)。そして彼は2016年に発表した論文において、マクルーハンとアンダーソンの親和性とナショナリズムの変容について更なる議論を展開する(新倉2016a)。

彼は両者の親和性について次のように指摘する。アンダーソンのICにおける議論はマクルーハンのメディア論に準拠することが明らかであるが、従来の研究では「マクルーハンのメディア論そのものを、ナショナリズム研究として論じる試みは十分ではない」とし、新倉はアンダーソンのナショナリズム論をメディア論的に分析する(新倉2016a: 1)。

新倉はICにおける出版資本主義の概念には近代複製技術と資本主義の市場原理という二つの側面があると指摘する。この二つの側面によって、複製された同一商品の大量生産が可能になる(新倉2016a: 3-4)。新倉は、複製された商品の大量生産は産業資本主義の特徴であるゆえ、アンダーソンが論じているのは「国民国家(=ネーション)」であるが、「本来、(ICの)そのポテンシャルは、国民国家の成立をも包含する産業資本主義の体制に向けられているといえる」と論じる(新倉2016a: 4、括弧引用者)。

彼は産業資本主義を象徴する「機械」と大量生産の原理を分析することで、マクルーハンのメディア論におけるナショナリズムをめぐる議論を再検討する。マクルーハンは近代複製技術が均質的で画一的な時空間の形成を促すと論じ、その原因が「機械」による大量生産の原理にあると主張する。この主張について新倉は次のように述べている。「機械」は大量生産の生産方式を通して画一性や均質性を呼び出す効果をもたらし、それらはネーションという共同体をめぐる想像力(=ナショナリズム)を構成する「身体」——「個々の身体や意識を含んだ人間存在」——の諸感覚の比率を変容させていく(新倉2016a: 8)。すなわち、マクルーハンのメディア論をナショナリズム論の視点から分析する際、「機械」と「身体」の関係性を議論することが必要かつ有効だと新倉は主張する。言い換えれば彼は、「機械」と「身体」の関係性の構図をナショナリズム論とメディア論に共通するものとして位置づけている。

さらに新倉はこの構図でメディア論をナショナリズム論的に再考するという方法論を採っている。彼は「機械」と「身体」の関係性を提起することで、ナショナリズムの変容の問題に有効な手がかりを明らかにする。新倉によれば、アンダーソンはICにおいて、ナショナリズムの変容の問題を提示したが、それを解決するための理論的な枠組を提示していない。ところがマクルーハンは「『機械』に主導される時代から『電気』に主導される時代へ」という時代移行を暗示している。それゆえ、「もし『機械』から『電気』という産業社会の変容を受け容れるなら、そこでは、ナショナリズムはある種の失効を宣告されている」と新倉は主張する(新倉2016a: 8)。ここでいう「機械」とは、近代複製技術に代表される利益の増大と市場の拡張のための大量生産(=複製)の技術を指す。それゆえ「機械」という概念は「技術」の概念に含まれているといえるであろう。

ところが新倉の議論は結局「機械」(の概念を含む「技術」)が「身体」に

一方向的に影響を及ぼすところとどまり、「機械」（の概念を含む「技術」）と「身体」の相互作用的なダイナミズムには触れていない。この相互作用的なダイナミズムの可能性に関して示唆を与えてくれるのが柴田（2013）の考察である。

2.2 「身体」から「技術」への反作用の可能性をめぐって

「技術」と「身体」の関係性はマクルーハンの「メディアの異種交配」において理論的に分析されている。「メディアの異種交配」とは、異なる形式のメディアが従来のメディアを呑み込みながら、社会の主導的メディアの地位を占めることを意味する（UM：53-56＝50-52）。それによってもたらされたのは、人間の感覚や認識の新しい変化である。マクルーハンはこの概念で、社会で発生する異なるメディアの複合化現象を説明する。たとえば文字文化と口誦文化の複合化の場合、活字メディアは主導のメディアになる。その結果、活字メディアによる個人の内的、画一的、均質的な思考様式は口語による部族的、集団的な思考様式を侵食する。マクルーハンが主張するのは、新しいメディアが新しい刺激をもたらすことによって、新たな感覚や認識が生み出されるということである。マクルーハンによれば、新たな感覚や認識は「中枢神経組織」が自己防衛をするために刺激を感じる器官や機能を「切断」あるいは「分離」する結果である（UM：46＝44）。

柴田（2013）はこの「切断」あるいは「分離」の過程について次のように論じる。「『中枢神経系』がマクルーハンの）文脈から脳を指すと理解して差し支えない。脳は、（新しい刺激がもたらした）このようなストレス状態を回避するために、身体を切断して自分の外に対立刺激物をつくり出し、現在の刺激を相殺することで、ストレスを緩和しようとする」⁷（柴田2013：85、括弧引用者）。ここで柴田はマクルーハンの言葉を借用し、ストレスを生じさせるメディアを「刺激物」とし、ストレスを緩和するメディアを「対立刺激物」と呼ぶ（UM：47＝45）。柴田は「切断」あるいは「分離」の過程を、「対立刺激物」が「刺激物」からの刺激を「相殺」する過程であるという。この過程において、感覚の「切断」あるいは「分離」は感覚自体を変化させるのではなく、刺激の「相殺」の問題、すなわちメディアによって調整される諸感覚の比率の問題となる。なぜなら、「身体」の感覚自体はメディア技術によって変化させることはできないからだ。メディア技術が変えられるのは「身体」の感覚自体ではなく、統合的な感覚を構成する諸感覚の比率である。

個人の諸感覚の相互比率の変化を、マクルーハンは「感覚比率」の変化として説明する。「感覚同士の間で保たれている比率が変わるのは、どれかひとつの感覚、もしくは肉体的、精神的機能のひとつが、技術という形式をとって外化するときである」（GG：299＝402-403）。この感覚比率の変化プロセスについて柴田は次のように解釈する。まず、人工物としてのメディアは特定の感覚が身体の外部に具現化したもの、すなわち「外化」したものである。次の段階において「身体」は当該メディアを使用することでそのメディアを「内化」し、つまり「身体」の感覚として取り込む。その結果、今度は外化され

►7 柴田によれば、マクルーハンが使っている「ストレス」や「切断」の概念は、生理学者であるセリエのストレス学説から転用された概念だとされる。セリエのストレス学説に基づいて、マクルーハンによる「ストレス」とは、それが作り出された状況に適応する身体の「防衛反応」として理解されるべきであり、それに関連する「切断」の概念は、身体の損傷による炎症とともに細胞組織が排出される現象から言い換えられたものだ、と柴田は指摘する（柴田2013：90-92）。

なかった感覚と機能が抑圧され、感覚比率がまた変化する（柴田2013：80-81）。柴田の考察によって、感覚比率の変化とは、メディアによる「身体」の感覚及び機能の特化（＝外化）と抑圧（＝内化）であることがわかる。

柴田は「感覚比率」の変化のメカニズムを解明したが、「技術」と「身体」の関係性についてはこれ以上言及しなかった。だが、以上の柴田による議論を踏まえれば、次のことを引き出すことができる。すなわち、メディアからの影響を受けて「身体」の感覚の量的変化は起きるが質的变化は起きない、という点である。言い換えれば、「技術」が「身体」に影響を及ぼすのは、質的变化ではなく、量的変化のみである。質的变化が起きないということは、柴田の議論から「身体」におけるある種の宿命的な性格——メディア（技術）によって克服されえない性格——を読み解くことができる。この点をさらに掘り下げると次のような結論を導くことができる。「技術」は如何に「身体」に影響を及ぼそうとしても、こうした宿命的な性格を克服することは不可能である。こうした宿命的な性格があつてはじめて、「身体」には「技術」の影響可能な範囲に（量的変化のみという）制限をかける反作用が可能になる。「身体」の質的变化が起きないという宿命的な性格は、「技術」と「身体」の相互作用の前提条件でもある。次節では「技術」から「身体」への作用と、「身体」から「技術」への反作用という相互作用的なプロセスを考察し、さらにアンダーソンのナショナリズム論を介しながら、こうした相互作用の観点からナショナリズムを再解釈することを試みる。

3 「技術」と「身体」の相互作用とナショナリズム論

3.1 「メディアの異種交配」の原理が孕む「技術」と「身体」の相互作用

マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」の相互作用は主に「メディアの異種交配」の原理において分析されている。「メディアの異種交配」の原理とは異なる形式のメディアが従来のメディアを呑み込みながら、社会の主導のメディアの地位を占める過程を指す。マクルーハンはこの原理に基づいて、社会における多様なメディアの複合現象を一般化する。「メディアの異種交配」の原理がもたらす効果について彼は、「メディアの雑種化あるいは異種交配は、さながら核分裂あるいは核融合のように、大きな新しい力とエネルギーを放出する」と論じる（UM：53=50）。マクルーハン「メディアはメッセージである」と主張する（UM：7=7）。ここでの「メッセージ」という言葉が意味するのは、当該メディアがもたらすコミュニケーションの「スケール、ペース、パターンの変化」を指している（UM：8=8）。新しいメディアが新しいコミュニケーションの形を作り出す意味で、メディアは新しい諸感覚の比率を生成するものになる。彼の説明によれば、すなわちメディアは「ものを『生起させる動因』である（“make happen” agents）」（UM：53

＝50)。このように、多様なメディアの複合はメディア環境の変化や諸感覚の新たな比率をもたらすとマクルーハンは主張する。新しい変化や感覚の比率の生成という「生殖的」な意味で、彼はメディアの複合化の現象を「異種交配 (hybridizations)」に喩えている。

二つの代表的な異種交配としてマクルーハンが取り上げるのは、文字文化と口誦文化の交配、そして電気文化と文字文化の交配である。というのは、この二つの事例において個人の思考様式から社会の価値まで変容が幅広く起こったからである。この二つの現象は以下のように説明することができる。

まず、前者の交配については次のような説明がなされている。活字メディアが主導の地位を占めた結果、文字文化が口誦文化に代わって支配的な文化となる。文字文化は個人の内的思考を可能にし、さらに画一性や均一性を有する思考様式をもたらす。それによって、従来の口誦文化の中に形成された部族的な思考による共同体意識は崩壊し、「核分裂反応」のような効果が生み出される。この「核分裂反応」は個人を集団から分離し、ばらばらになった個人は彼らのアイデンティティの帰属先としてのナショナリズムを求めるようになる。たとえば、中国、インド、アフリカなどの活字メディアが（口誦文化の話し言葉に取って代わって）主導となった地域の近代において、個人主義やナショナリズム運動が勃興することにマクルーハンは言及する (UM: 54-55=51-52)。

後者の交配については次のような説明がなされている。電気文化と文字文化が異種交配する際、電気文化がもたらす部族文化は集団的な意識を増強する。たとえば、すでに個人主義やナショナリズムが成熟した西欧社会において、テレビをはじめとする電気メディアが主導の地位を占めると、部族的、共同体的な思考様式が返り咲く。その結果、個人主義やナショナリズムのような思考様式が弱体化され、国民国家を越える規模の集団が生まれる。マクルーハンはこのようなことが「核融合反応」の効果であると論じる。「核融合反応」の効果は、個人を集団に包み込み、かつ（ナショナリズムよりも集団的利益を優先させる）集団的な思考様式を露わにする。マクルーハンは「ヨーロッパの新しい共同市場」（後のEU）をその一例として挙げている (UM: 55=52)。

マクルーハンは二つの異種交配の過程を論じているが、特に文字文化と口誦文化の異種交配の過程において、印刷技術は「核分裂反応」を増幅する効果があると主張する。マクルーハンは、印刷技術による複製の原理が均質的時空間を可能にするがゆえに、人間の視覚をより一層拡張すると主張する。彼はUMの18章「印刷された言葉：ナショナリズムの設計主」において、印刷技術による拡張効果をナショナリズムと関連させながら、次のように述べている。

社会的に見ると、活字印刷という形をとった人間の拡張は、国家主義 (nationalism)、産業主義、マス市場、識字と教育の普及というものをもたらしめた。なぜなら、印刷は正確に反復可能なイメージを提供し、それが社会的エネルギーを拡張させる、まったく新しい形態を刺激したからであっ

た。(UM: 188=175、括弧引用者、傍点引用者)

マクルーハンに従えば、印刷技術は人間の視覚の拡張として、多岐にわたり社会に影響を及ぼす一方、こうした状況に適応すべく人びとも社会の「新しい形態」を模索していくという。「新しい形態」とは、印刷技術によってもたらされた新しい刺激や感覚に対応する世界を思考し認識する様式であり、その一つがナショナリズムである⁸。

この異種交配の過程はさらにUMの第4章「感覚麻痺」をめぐる議論を通して次のように一般化される。メディアは「身体」を拡張するが、「身体」には宿命性という限界があるために、拡張に適応できない部分（質的部分）もある。この部分に対し当該メディアは新しい刺激を引き起こす。さらに新しい刺激はストレスをもたらす。中枢神経組織はストレスによる傷害を避けるために自己防衛をする。自己防衛とは、中枢神経系が「対立刺激物」を使うことで「傷害を起こしている器官、感覚、機能を切断あるいは分離する」ということである（UM: 46=44）。こうした自己防衛（＝「切断」あるいは「分離」）の結果として「感覚麻痺」がもたらされ、「感覚麻痺」によって刺激が無効化されていく。「感覚麻痺」の内実は感覚比率（量的部分）の変化である。前述の柴田（2013）の指摘のように、感覚自体が宿命性を持つ「身体」に依存するものであるがゆえに、それは宿命的なものでもある。そのため「切断」あるいは「分離」の過程によって変えられるのは「身体」の感覚そのものではなく、全体の統合的な感覚を構成する諸感覚の比率だけだとされる。新しい感覚比率を通して新しい生の様式⁹が生み出される。こうして人びとは新しい「技術」に対応することが可能になる。

この調整の過程の具体例を挙げると、たとえば、印刷技術によってもたらされた視覚世界において、従来の垂直的な身分制度や市場などは、もはや視覚の拡張によってもたらされた新しい刺激に耐えられなくなる。その結果、水平的な国家制度や市場が新しいメディアとして要請され、旧来の垂直的な身分制度や市場を「切断」あるいは「分離」することで感覚を麻痺させるといふ（UM: 188=175）。人びとが近代複製技術によってもたらされた刺激に対応できるようになると、同時に国境や市場を横断する手段が求められるようになる。

上述の「メディアの異種交配」の過程において、「技術」と「身体」の相互作用を次のように解釈することができる。「技術」から「身体」への作用とは、「技術」（たとえば近代複製技術）が感覚と神経を拡張し、「身体」に刺激を及ぼすことで、「身体」にストレスを感じさせることである。「身体」から「技術」への反作用というのは次のようになる。「技術」からの刺激を回避するために、「身体」の感覚の（質的变化ではなく）量的変化が発生する。具体的には、「身体」は「対立刺激物」を使い、器官や感覚を「切断」あるいは「分離」し、感覚麻痺を起こすことで、感覚比率を変える。こうして「身体」は新しい感覚比率で「技術」による刺激に対応する。これが身体側の反作用である。それと同時に、この過程において生じた（「技術」としての）「対立刺激物」はまた「技術」の更なる変容を誘発していく¹⁰。こうして、「技術」

▶8 マクルーハンとアンダーソンは印刷技術をナショナリズムの形成の条件として認める。しかし両者によるナショナリズム生成のルートには差異がある。マクルーハンの場合、ナショナリズムは印刷技術による視覚の拡張、すなわち画一的、均質的なものが量的に視覚化された結果だと考えられる。この場合、身体とナショナリズムは、印刷技術を媒介として間接的につながっている。それに対しアンダーソンの場合、ナショナリズムは印刷技術がもたらした均質的で空虚な時間と空間の観念の中で、人間の想像力によって生まれたものである。ここでは、身体とナショナリズムは直接的につながっている。両者の理論にそれぞれ従って、メディア環境の変容とともに、身体とナショナリズムが如何に変容するのかという問いを思考する際、この原理的な差異は、大きな意味を持つことが推測できる。

▶9 だがマクルーハンの人間の生の調整の過程という考え方についての最初の言及はUMではなく、まず『機械の花嫁』の序文で提起したエドガー・アラン・ポーの小説『大渦巻（A Descent Into The Maelstrom）』に関する議論に見られる。彼は、大渦巻の動きを観察し、見出した原理と規律に従いながら脱出した小説の主人公のやり方と同様に、われわれもメディアの渦巻をよく観察し、メディアの原理と規律を見出してから、そこから脱出する手段を思考するべきだと主張する。この議論において次のことが示唆される。つまり人間の身体をめぐる宿命性からの制限をわれわれは完全に克服することができない。それゆえ人間の自らの調整が必要だということである（MB: V=1-2）。

- ▶10 たとえば、文書及び貨幣が新しいメディアとして社会に登場する場合、情報やモノの流通「密度」が増大し、刺激として人びとにストレスを与え、その結果、それに対応できる新しい交通技術（車輪など）が「対立刺激」として要請される、という例をマクルーハンは挙げている（UM：46-47=44）。マクルーハンの議論をさらに展開すると、一つの継続的な過程が見られるようになる。新しい交通技術によって新しい感覚比率が変わり、そして人びとは増大した流通「密度」に対応できる。一方、新しい交通技術も「対立刺激物」として、次の段階の「技術」の新しい変容にも刺激を与えていく。
- ▶11 本稿は『機械の花嫁』をMBと表記する。この本よりの引用を、MBと英文版（1951=2011）のページ数＝邦訳（1991）のページ数の形で示す。
- ▶12 マクルーハンによる性と暴力をめぐる議論はフロイトの精神分析の理論に親和的でもあるが、マクルーハンの議論の中に性と暴力の関連性を説明するために言及されたのはウィルヘルム・ライヒとG・レグマンである。前者は「機械化」により「暴力はセックスの代用品」になることを論じている。後者は漫画や小説における暴力を研究している（MB：99=239-240）。この点から考えれば、マクルーハンはフロイトが行う理論的な精神分析より、ライヒが注目する技術と身体の関係性、及びレグマンが研究するメディア文化に興味深いと推測できる。この推測をマクルーハンのアメリカの大衆文化を考察する志向性に根拠づけをすることができる。

と「身体」の相互作用は絶え間なく継続する。

柴田（2013）が示唆しているように、以上の相互作用の前提条件の一つは、「身体」の感覚の質的变化が生じないということである。この「身体」の質的部分の不変性については、マクルーハンの『機械の花嫁』（以下MB）¹¹における機械と性行為をめぐる議論からも見出すことができる。

マクルーハンはMBの中で機械が性に与える影響について論じる際、「身体」について次のように言及する。マクルーハンによると、人間は機械を使うことで、「機械の行動様式」を身につけるようになった。その結果、「人間のみならず統一体としての肉体からのセックスの遊離」という現象が発生するという（MB：99=236）。ここでマクルーハンは強調したいのは、こうした現象により性行為は生物的な行為から生産、複製可能な機械的な行為となるが、肉体から分離された性行為は性的な満足を生み出すことができない、という点である。

この点に関してMBから次の解釈を引き出すことができる。つまり性的な満足は精神的な喜びであり、それは肉体を媒介としながら実現されるからである。肉体を媒介するというのは、肉体を通して性行為を完成することだけではなく、肉体を対象として侵犯かつ支配するという深層的な意味をも含むということだとマクルーハンは論じる。性行為が機械的な行為として肉体から分離する場合、性的な満足が失われたゆえに、人間はまたそれを暴力と死などの「肉体的な危険（physical danger）」に求めていく（MB：99-100=239-240）。すなわちマクルーハンによれば、機械によって性と肉体は分離したが、肉体に依存する原初の性への欲求、すなわち肉体への侵犯と支配の欲求を消滅させることはできない。性への欲求はなくなるのではなく、暴力と死などの他の肉体と関連する形式によって表現されるという¹²。

「身体」は結局、肉体の原初的で超越的な宿命性から逃れることはできない。このようにマクルーハンの文脈において、「身体」の持つ宿命性が「機械によって満足できない性への欲求」として現れている。MBにおける機械と性行為の関連性をめぐる議論において、マクルーハンは「技術」と「身体」の相互作用という認識の輪郭を先行的に論じていると考えられる。

3.2 「近代における生の意味の喪失」が孕む近代性と宿命性の相互作用

マクルーハンにおける「技術」と「身体」の相互作用はICにおけるアンダーソンのナショナリズム論において、近代性と宿命性の相互作用という形で現れる。アンダーソンは近代性と宿命性の関係性を前提にネーションの形成をめぐる理論を展開している。アンダーソンは近代性の概念を明確に示していないが、ICの文脈に従えば近代性とは資本主義・近代複製技術及びそれに依拠する近代における世界理解の様式、理性と合理的価値として理解しても差し支えない。それに対し宿命性とは近代性によって超越できない人間の宿命的な生と死の問題を指す。この意味で、マクルーハンの「技術」の概念とアンダーソンの近代性の概念は、活字印刷に代表される近代複製技術において重なり合う。他方、前述の柴田（2013）の考察によって示されたように、メディ

ア（技術）によって克服されえない「身体」の宿命的な性格は、上述の宿命性の概念と非常に親和的である。それゆえ、アンダーソンのナショナリズム論における近代性と宿命性の概念とその関係性は、マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」の概念とその関係性とは対照的である。換言すると、アンダーソンによる「近代性」と「宿命性」の対置と、マクルーハンによる「技術」と「身体」の対置は、異なる文脈で現れた同じ構造からなる関係性として理解しても差し支えないであろう。

近代性と宿命性の関係性は「近代における生の意味の喪失」の現象をきっかけにして現れる。「近代における生の意味の喪失」とは、近代化とともにそれまで意味を付与してきた宗教が退潮し、生と死の宿命性が意味を奪われた形で露呈することで、近代の人びとに不安を感じさせ、喪失感を与えたことを指す。まずアンダーソンの世界理解の様式の変化の過程を概観しておこう。

アンダーソンによれば、中世の世界理解の様式として、未来に成就される「即時的現在における過去と未来の同時性」という垂直的な「メシア的時間」がある（IC：24=49）。この時間観念は中世の宗教や王国において支配的な地位を占めるという。アンダーソンは宗教や王国を、生と死に関する意味を人びとに付与する役割を果たす「文化システム」として捉える（IC：12=35）。ここで生と死の宿命性とは、「偶然と必然の組み合わせに満ちている」人間の生における「病い、不具、悲しみ、老い、死といった人間の苦しみの圧倒的重荷」のことを指す（IC：10=33）。こうした宿命的な苦難について、宗教や王国は人びとに救済——宿命性をめぐる意味と解釈——を与えていく。しかし近代に入り、近代複製技術は「均質で空虚な時間」観念をもたらした（IC：26=51）。それとともに、均質で連続する空間が生まれた。この時空間観念が新しい世界理解の様式として、従来の宗教や王国による生と死への意味付与を無効なものとし、その結果、生と死の宿命性が救済されえないものと人びとの目に映るようになり、すなわち「近代における生の意味の喪失」の状態に陥ったとアンダーソンは論じる。

「近代における生の意味の喪失」という現象が近代性と宿命性の相互作用を引き起こし、人びとに新たな共同体すなわちネーションの想像を促すとアンダーソンは主張する。まず「近代における生の意味の喪失」という状態は、近代化が生と死をめぐる宿命性を露わにする作用を顕在化させる。近代的生産技術及び思想は生と死をめぐる宿命的な苦難を客観的に解釈できるが、その解釈は、人びとに喪失感や不安を与えることしかできないほど過酷である。たとえば新倉（2016b）は植民地の人びとに経験されている「二重の疎外」の現象で、こうした喪失の状態を説明する。新倉によると、植民地における近代化を先取りするエリートたちは、まず伝統の故郷から「疎外」される。さらに彼らの「教育的巡礼と行政的巡礼（educational and administrative pilgrimages）」（IC：140=218）が植民地の範囲までに限定されるため、それより先の帝国の首都への昇進の道は阻まれ、帝国からも「疎外」される。このように、「近代における生の意味の喪失」は「二重の疎外」として人びとに実感されるという。

次に、「近代における生の意味の喪失」の状態——人びとに意識された近

代性から宿命性への作用——に陥ってはじめて、宿命性から近代性への反作用が発生する。生と死をめぐる宿命性は近代的な技術や理性的な思考などによって恣意的に変えられることができない。それゆえ喪失感を補填するためにも、人びとに受け入れられる「合理的」な宿命性の意味を生に付与しなければならない。言い換えれば、宿命性は近代性に対し制限をかけるという作用をしている。

このような相互作用があるからこそ、「近代における生の意味の喪失」の状態において求められる救済の形式は恣意的に選ばれるものではなくなる。アンダーソンはこう述べる。「そこで要請されたのは、運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと、世俗的に変換することであった。(中略) 国民の観念(an idea of nation) ほどこの目的に適したものはなかったし、いまもない」(IC: 11=34、括弧引用者)。アンダーソンによれば、ネーションはこのような近代性と宿命性の相互作用のもとに形成される。ネーションは近代化によってもたらされた新しい時空間観念と一致し、同時に宿命的な生と死の問題について人びとに受け入れられる答えをも与えられる唯一のものである。それゆえこうした人びとを救済する役割に、アンダーソンがナショナリズム擁護の態度を取る最大の理由がある。彼はネーションを宗教のように人びとの生に意味を付与するものと比較しながら理解すべきだと主張する¹³。この意味で、彼は救済という宗教の用語を用いてネーションの作用を喩える。それは単なる宗教的なメタファーではない。宗教やネーションのいずれの文脈においても、この言葉は生と死をめぐる宿命的な苦難から人びとを救い出すという意味を持つ。そしてこの救済の意味を、近代性と宿命性の相互作用の枠組において把握することが重要である。

▶13 アンダーソンはナショナリズムが宗教に取って代わったものだといっているわけではない。彼は、ナショナリズムをそれに「先行する大規模な文化システムと比較して理解」すべきだと主張する(IC: 12=34-35)。

3.3 「技術」と「身体」の相互作用の枠組からのナショナリズム理解の可能性

以上の議論を踏まえ、「メディアの異種交配」の原理が「技術」と「身体」の相互作用を促すプロセスと、「近代における生の意味の喪失」の近代性と宿命性の相互作用を促すプロセスとの対応関係をまとめたものが表1である。

表1はメディア論における「技術」と「身体」の相互作用と、ナショナリズム論における近代性と宿命性の相互作用との平行的な対応関係を示す。この対応関係は、メディア論とナショナリズム論を結びつける一つの共通の枠組を提示している。この枠組は、メディア論の視点からナショナリズム論を論じる際に有効である。その論拠を次の三点から説明する。

まず、「技術」と「身体」の相互作用の枠組は近代性と宿命性の相互作用とは平行的な関係であることを示すことで、「メディアの異種交配」(マクルーハン)の原理から「近代における生の意味の喪失」(アンダーソン)をメディア論的に再解釈し、一般化できるということである。すなわち、近代における理性・合理的価値・近代複製技術及びそれらがもたらす新しい時空間観念を、「身体」が周りの世界を認識するために必要な(聴覚、視覚などを越える広義的な)感覚の拡張として考える場合、それらは世界を認識するための「新しいメディア」ともなる。そして同様の意味で、中世の宗教や王

■表1 「『技術』と『身体』の相互作用」と「近代性と宿命性の相互作用」の対応関係

要因となる概念	作用の段階	反作用の段階	結果	プロセスの特徴
マクルーハンにおける「メディアの異種交配」	主導メディア(=技術)の変容からの作用が先行し、「刺激」をもたらす	「身体」が器官や感覚を「切断」、「分離」することで感覚を麻痺させ、感覚比率を変化させる	新しい感覚比率による個人的思考(文字文化)と集团的思考(電気文化)が形成され、「技術」の後続の変容を誘発する	継続的なプロセス
アンダーソンにおける「近代における生の意味の喪失」	「喪失感」によって、近代複製技術(=近代性)からの「生と死をめぐる宿命性」を露わにする作用が顕在化される	宿命性が合理的な意味付与(救済)を要請する	解決策としてのネーション(想像の共同体)が想像される	完結的なプロセス

国にもたらされた価値や時空間観念などは「旧来のメディア」と捉えることもできる。つまりICで論じられるネーションの登場の時期である18世紀ごろは、マクルーハンが論じる「メディアの異種交配」すなわち「メディア」の複合の時期以外の何でもない。この時期に新しい(近代複製)「技術」による新しい時空間観念を持つ「メディア」が主導的地位を占めていく。その結果(「身体」の)生と死をめぐるの宿命性への従来の宗教による意味付与(救済)では対応できず、また新しい意味付与の形式も未だない。中世の宗教や王国による古い世界認識は「身体」(に依存する精神)への「刺激」に転化する。こうした事態から脱却するために生まれるのがナショナリズムなのである。このように、「近代における生の意味の喪失」は「メディアの異種交配」の原理の一つの表現として分析することができる。

次に、「技術」と「身体」の相互作用は、アンダーソンのナショナリズム論における近代という時代的限界を克服する可能性があるということである。この相互作用はマクルーハンにおいてはもちろんのこと、アンダーソンの問題意識の深層にも、近代性と宿命性の相互作用として存在する。だが、アンダーソンの問題意識は近代化の背景のもとで、人間が生と死の宿命性に如何に向き合い、さらには救済(意味付与)を如何にもたらすか、という視座を含む。言い換えれば、アンダーソンにおける近代性の概念が「近代」という時代の背景に限られている。この点に基づいて、アンダーソンは近代の一つの解決策として、近代性と宿命性の相互作用の帰結であるネーションを提起する。その際、ナショナリズムの概念は近代と連動するものとなるが、宿命性からの反作用は明確には強調されることはなかった。アンダーソンのナショナリズム論には近代を越える潜在的な可能性があるが、結局、時代的な制約によって、その可能性が最大限に活かされなかった。他方、マクルーハンの

場合、「身体」の反作用にはさらに「技術」の後続の発展や変容に刺激を与えていく可能性が潜んでいるがゆえに、「技術」と「身体」の相互作用が継続的で無限ループのような形で示されている。さらに、新倉（2016a）によって示唆されたように、マクルーハンにおける「技術」の概念は「機械」及び「電気」という異なる時代を象徴する概念を内包しているがゆえに、この「技術」の概念には「近代」を越える一般的な概念として展開できる潜在的可能性もある。それゆえ「技術」と「身体」の相互作用の枠組は、メディア論とナショナリズム論をつなげると同時に、アンダーソンのナショナリズム論における「近代」という時代的背景を越えることも可能である。

最後に、「技術」からの作用が不可避免的に先行するがゆえに、「技術」と「身体」の相互作用は間断なく発生しつづけるということである。その理由は二つある。一つ目は、前段落で述べたように、「身体」から「技術」への反作用には「技術」の新しい変容を誘発する可能性があるということ。二つ目は、「技術」の概念自体が動的な性格をも持つということ。この二つの組み合わせが「技術」と「身体」の継続する相互作用の前提条件となっていることである。

「技術」の動的な性格は、植民地における社会と政治を研究するCheah (2003) によって明らかにされている。彼によれば、資本主義は一種の「静止できないエネルギー (incessant movement and restless energy)」を内包しているという (Cheah 2003: 4-5)。ここでの「エネルギー」とは上述の資本主義の利益や市場を求めつづける原動力を指す。Cheahの議論を前提にすると、この「エネルギー」は「技術」に自主的に「動く」という動的な性格を付与する。この意味で、「技術」は主導的かつ先行的に「身体」に影響を与えていくことが可能なのである。この関係性は逆説的に解釈すると、「技術」の作用が発生しない限り、「身体」の反作用も発生しない、という順序及び共働関係をも示す。Cheahが言及する資本主義の「静止できないエネルギー」によれば、「技術」の先行する作用は不可避免かつ絶え間なく発生しつづけている。この意味で、「技術」と「身体」の相互作用も間断なく継続することになる。さらにナショナリズムをこうした相互作用の結果として捉えるのならば、ナショナリズムは静的なものではなく、動的なダイナミズムを孕んでいる。このダイナミズムはナショナリズムに、継続的に変容しつづける性格を与えている。

4 むすび

本稿はアンダーソンの論じる「近代における生の意味の喪失」によってもたらされた近代性と宿命性の相互作用を媒介とし、マクルーハンによる「メディアの異種交配」の原理から導出された「技術」と「身体」の相互作用の解明を試みた。この考察から得られた結論と意義を三点挙げておく。

第一に、マクルーハンのメディア論における「技術」と「身体」には相互

作用的な関係性があることを明らかにした。この関係性はマクルーハンによって明示的に論じられていないものの、彼の議論の深層に潜んでいる。さらにその意義や展開可能性を十分に明らかにするためにアンダーソンを援用した。マクルーハンにおける「メディアの異種交配」の原理は、『技術』の変更からの作用に対し『身体』が反作用を引き起こす」という相互作用をもたらす。一方、アンダーソンにおける「近代における生の意味の喪失」は、「近代性からの作用に対し宿命性からの反作用が要請される」という相互作用をもたらす。この二つの相互作用はパラレルな関係性がある。

第二に、「技術」と「身体」の相互作用という枠組はナショナリズム論をメディア論的に一般化することができる。この点はナショナリズムの形成過程を解釈できるのみならず、さらにナショナリズムの変容に次のような新しい視点を与えることもできる。たとえばナショナリズムの変容を考察する際、メディアにおける言説分析という方法は一般的である。本稿は、メディアの進化とともに生まれる「技術」と「身体」の相互作用の変化を考察することで、ナショナリズムの変容を探究する、という新しい方向性を示唆している。

すなわち第三に、「技術」と「身体」の相互作用はナショナリズムの変容のメカニズムを分析するための有効な枠組として提示することができる。まず「技術」と「身体」の相互作用は「絶え間なく継続する」という特徴をも持つがゆえに、ナショナリズムの変容の過程は一つの静的な状態（段階）から次の静的な状態（段階）への移行としてではなく、一つの継続的に変容しつつける過程として捉えることができる。また、アンダーソンは近代複製技術に基づく活字メディアの普及がナショナリズムの想像力の形成を促すと主張する。そうであるならば、テレビ、インターネットが活字メディアに取って代わって主導的なメディアとなる場合、アンダーソンの言う旧来のナショナリズムがなくなるのではないかと、という結論に至る。ところが近代複製技術にせよテレビにせよインターネットにせよ、それらをマクルーハンによる「技術」の概念に取り入れると、上述の結論は次のように変わる。メディアの変容とは、ナショナリズムという想像力をもたらすメディア（＝近代複製技術）が別のメディア（＝テレビ、インターネットなど）に変わるのではなく、ナショナリズムに影響を及ぼすメディア（＝「技術」）自体に変容が生じることを意味する。そしてそれに伴ってナショナリズムはなくなるのではなく、それ自体に何らかの変容が生じることになる。このように変容した（そして変容しつつけていく）ナショナリズムは同じようにナショナリズムと呼ぶべきものなのか、それとも別のものとして認識すべきなのか。こうしたナショナリズムをやはり近代という時代の解決策として見なすことができるのか。これらの問題については本稿で詳述する余裕はない。ただし少なくとも上述の視点は、ナショナリズムの変容についての新しい分析枠組となりうるのではないだろうか。

参考文献

- Anderson, Benedict. (1983=2006) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (=2007、白石隆、白石さや訳『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山)
- Anderson, Benedict. (2003) 'Responses,' Jonathan Culler and Pheng Cheah ed. *Grounds of Comparison: Around the work of Benedict Anderson*, Routledge.
- Cheah, Pheng. (2003) 'Grounds of Comparison,' Jonathan Culler and Pheng Cheah ed. *Grounds of Comparison: Around the work of Benedict Anderson*, Routledge.
- McLuhan, Marshall. (1951=2011) *The Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*, Duckworth Overlook. (=1991、井坂学訳『機械の花嫁：産業社会のフォークロア』竹内書店新社)
- McLuhan, Marshall. (1962=2014) *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press. (=1986、森常治訳『グーテンベルクの銀河系：活字人間の形成』みすず書房)
- McLuhan, Marshall. (1964=2005) *Understanding Media: The Extensions of Man*, Routledge. (=1987、栗原裕、河本仲聖訳『メディア論：人間の拡張の諸相』みすず書房)
- 柴田崇 (2011) 「著作解題：グーテンベルクの銀河系 活字人間の形成」『KAWADE 道の手帳 マクルーハン：生誕100年メディア（論）の可能性を問う』河出書房新社
- 柴田崇 (2013) 『マクルーハンとメディア論：身体論の集合』勁草書房
- 平子友長 (2003) 「ステイト・ネーション・ナショナリズムの関係：一つの理論的整理」『唯物論研究年誌』2003 (8)
- 趙瀚雲 (2018) 「『想像の共同体』における近代性と宿命性の相互作用——ベネディクト・アンダーソンのネーション論再考」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』2018 (27)
- 津田正太郎 (2016) 『ナショナリズムとマスメディア：連帯と排除の相克』勁草書房
- 富永健一 (1987) 『社会構造と社会変動：近代化の理論』放送大学教育振興会
- 新倉貴仁 (2008) 「海賊版としてのナショナリズム®：ナショナリズムとメディアをめぐる理論的視座の構築」『マス・コミュニケーション研究』2008 (73)
- 新倉貴仁 (2016a) 「『メディア論』再考：マクルーハンにおける産業社会とナショナリズムをめぐる」『コミュニケーション紀要』2016 (27)
- 新倉貴仁 (2016b) 「『想像の共同体』を越えて：ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論をめぐる」『思想』2016 (8)
- ベネディクト・アンダーソン (2005) (糟谷啓介、高地薫、他訳) 『比較の亡霊：ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社
- 吉見俊哉 (1994) 『メディア時代の文化社会学』新曜社

(2019年4月15日受理、2019年6月19日採択)